所長キャラバン

九州沖縄農業研究センターでは関係者との意見交換や新たな技術ニーズ探索などを目的に現地に出向く「所長キャラバン」を実施しています。

イチゴ：植物工場での夏秋どり栽培と蒸熱処理技術の開発

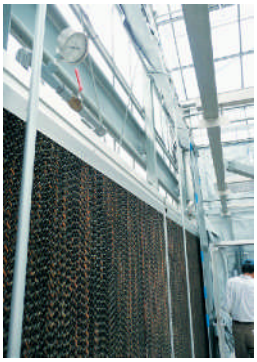
（参考）http://www.naro.affrc.go.jp/project/research_activities/laboratory/karc/044013.html

筑後・久留米研究拠点（久留米）の野菜花き研究施設の農研機構植物工場九州実証拠点（久留米）で8月22日（水曜日）に行いました。ここでは、コンソーシアム形式で太陽光利用型植物工場でのイチゴの周年多収生産の実証試験を行っています。そこで、コンソーシアム参加機関、佐賀県農業試験研究センターおよび福岡県農業総合試験場の関係者とともに施設を見学し、イチゴ植物工場による夏秋どり栽培などの普及可能性や課題などについて意見交換を行いました。

夏秋どり栽培施設には『パッド＆ファン簡易冷房装置』が設置され、施設内の気温を外気温より5℃程度低くできます。この施設ではイチゴの周年生産を目的に日長が長く気温が高い夏でも花芽分化しやすい四季成り性品種を使った試験、あるいは、低温・短日で花芽分化しやすい一季成り性品種に短日処理とクラウン温度制御を組み合わせた試験を行なっています。通常、暖地や温暖地の低標高地で夏秋期にイチゴを栽培するのはかなり難しいものです。しかし、実証試験の結果、安定生産に適した品種を開発し、パッドアンドファン簡易冷却装置などを導入すれば夏秋期でもイチゴの生産が可能であることがわかりました。また、イチゴ苗の重要病害虫であるうどんこ病、ハダニ類等を確実に防除する蒸熱処理装置の見学も行いました。

意見交換は活発で、助言や期待も多くありました。植物工場での実証研究が生産農家の経営に即したものとして普及し、１日でも早く、暑い夏に美味しいイチゴを食卓に提供できるようになることを期待しながら所長キャラバンを終えました。

【広報普及室】



（上写真）
イチゴ苗の病害虫を防除する蒸熱処理装置

（左写真）
パッド＆ファン簡易冷房装置

熊本県球磨地域での水稲品種「にこまる」の産地化

（参考）http://www.naro.affrc.go.jp/project/research_activities/laboratory/karc/044078.html

九州沖縄農業研究センターで育成した“おいしくて暑さにも強い水稲品種「にこまる」”の普及している熊本県の球磨地域で９月19日（水曜日）に行いました。球磨地域のＪＡくま管内では、今年度（2012年度）、水稲作付面積の約４分の１に相当する627ヘクタールで「にこまる」を栽培しています。産地化の進んでいる地域であることから、現地を訪問し、関係者と意見交換を行いました。

稲作農家が忙しくなりはじめる時期にもかかわらず、およそ40名弱の生産者も参加されました。「にこまる」に対する生産者の期待も大きいようです。キャラバンは、室内で意見交換などを行った後に「にこまる」の栽培圃場を見学するという行程で行いました。

室内の意見交換では、九州沖縄農研の研究担当者が品種「にこまる」の特性や栽培のポイントを、また、JAくまの営農指導員が球磨地域での「にこまる」の栽培の現状と課題を紹介し、その後、生産者とともに意見交換を行いました。意見交換では病害対策や栽培のポイントに関する質問もありました。

その後、ＪＡくま管内で「にこまる」を栽培している生産者の圃場２ヶ所にいき、立毛の「にこまる」を見学しながら意見交換を行いました。キャラバン実施直前の台風16号による影響はほとんどなく、倒伏も見られず“今年の作柄はまあまあで平年並み”が見込まれているということでした。

今回のキャラバンを通し、生産者や関係者と意見交換を行ったことで「にこまる」に対する大きな期待を実感しました。今後も関係者と協力しながら九州沖縄農研としてサポートを続けて行きたいと考えています。

【広報普及室】

生産者の「にこまる」栽培圃場の見学